

この出入口のこと知ってる?

阪神高速の出入口再発見!

うおざき [魚崎]

3号神戸線「魚崎出入口」



新落合橋から眺める住吉川。ここから上流一帯はもちろん、海岸近くの下流域まで支流や水路沿いに水車小屋があつた。かつては、牛が荷車を引いて水車小屋に玄米を運び、さらに精米し終わつた酒米を酒蔵まで運んでいた。

住吉川流域には、かつて約80もの水車小屋があり、酒造りなど、地域の産業を支えていました。

六甲山系から南へ流れる川は、山と海が近いことから勾配が急で、かつ水量も豊かです。こうした急流を動力として活用しようとつくられたのが水車です。河川沿いには、数多くの水車小屋がありました。水車小屋の歴史や水車の動力によって発展してきた地域の産業について、姫路獨協大学副学長で神戸深江生文化史料館副館長の道谷卓さんに聞きました。

六甲山系から南へ流れる川は、山と海が近いことから勾配が急で、かつ水量も豊かです。こうした急流を動力として活用しようとつくられたのが水車です。河川の辺り、灘辺（なだべ）が灘目（なだめ）に転じて、「灘目の水車」と呼ばれました。水車というと、小屋の外で水車がのどかに回っている様子を想像されるかもしれません。ただ、灘目の水車は、小屋をつくりその中で水車が回っていたという構造が大きな特徴です。特に、流域面積が広く支流も多い住吉川沿いにはたくさんの中で水車が回っていたといふ記録に残っています。

水車小屋が建てられ始めたのは、江戸時代初期です。明和7（1770）年にになると、幕府が油絞株（油絞業を行う株仲間）に油の製造を許可したことから、菜種を絞って菜種油をつくるために水車が使われたと記録に残っています。寛政年間（1796年）発行の『摂津名所図会』には、「名産灯油、葦屋、野寄、住

水車の動力で、酒米を精米

3号神戸線「魚崎出入口」のすぐ西を流れる、清流・住吉川。かつて、住吉川をはじめとする六甲山系から南へ流れる河川沿いには、数多くの水車小屋がありました。水車小屋の歴史や水車の動力によって発展してきた地域の産業について、姫路獨協大学副学長で神戸深江生文化史料館副館長の道谷卓さんに聞きました。

アジサイの原種は、日本を原産地とする「ガクアジサイ」です。江戸時代、長崎（現在の長崎県）の出島に滞在していた、ドイツ人の医師であつたシーボルトにより、ヨーロッパに紹介されました。彼が著した『日本植物誌』に、アジサイの一種として「シチダンカ（七段花）」という品種がスケッチされていました。しかし、この品種は、その後約一三〇年間、見つけられることはありませんでした。ようやく一九五九年に、兵庫県の六甲山系でひつそりと自生しているのが発見されました。そのため、アジサイは、六甲山を市街地の背景にもつ神戸市の「市民の花」に定められています。

一方、ヨーロッパで品種改良されたアジサイは、大正時代に、「セイヨウアジサイ」として、日本に逆輸入されています。近年は、アメリカ原産の園芸品種で、白い花が大きな房で咲く「アナベル」などとともに、人気となっています。

ある有名な作家と大スターが「アジサイの花をこよなく愛した人」としてよく知られており、その二人の命日が、「あじさい忌」とよばれています。

有名な作家は、昭和初期に出版された小説『放浪記』の著者である林美美子です。『放

エッセイ 夏 季節の言葉

「シチダンカ」と「あじさい忌」

もう一人は、俳優や歌手として多くのファンを引きつけた「昭和の大スター」、石原裕次郎です。この人の命日である七月一七日も「あじさい忌」といわれます。

ちなみに、アジサイは漢字では、「紫陽花」と書かれます。

これは、中国の唐代、白樂天という名前で知られる詩人、白居易によって使われた漢字名です。彼はあるお寺に植えられ、明るい紫色の花を咲かせていました。彼の時代、白樂天が詠んだ詩を詠みました。その漢字名が、日本に伝わってきて、アジサイに当てられています。

しかし、「白樂天が詠んだ紫陽花は、咲かせる植物は、アジサイではなくた」といわれます。眞偽は定かでないのですが、「白樂天が詠んだ紫陽花は、明るい紫色の花を咲かせるアジサイと印象が似ているライラックであった」といわれます。

田中 修
甲南大学特別客員教授
名譽教授
農学博士。京都大学農学部卒業、同大学大学院博士課程修了。スマシンニアーネ研究員、甲南大学理工学部教授などを経て、現職。

著書に、「日本の花を愛おしき」(中央公論新社)、「植物のすさまじい生存競争」(SBP)、「アル新書」など多数。
NHKラジオ「ともちやん科学電話相談」で、ほのぼのとした京都弁で子どもたちに植物についてわかりやすく教えてくれる回答者としてもおなじみ。

※新型コロナウイルス感染拡大の状況によっては、記載内容の変更や中止となる場合があります



HANSHIN HIGHWAY

関西とともに—【阪神ハイウェイ】
2021 SUMMER VOL.222
CONTENTS

エッセイ●季節の言葉
「シチダンカ」と「あじさい忌」田中 修

この出入口のこと知ってる?●阪神高速の出入口再発見!
① うおざき [魚崎] 3号神戸線「魚崎出入口」

住吉川流域には、かつて約80もの水車小屋があり、酒造りなど、地域の産業を支えていました

関西の名工
④ 姫野寿一さん (打ち出し鍋職人)
人の手による技術を生かし、金属と向き合うモノづくりの可能性は思いのほか大きい

教えてセンセイ
⑥ 鳴沢真也さん (兵庫県立大学自然・環境科学研究所天文科学センター 西はりま天文台・天文科学専門員)
知的生命は、地球人だけじゃない。果てなく広がる宇宙に必ずいる、地球外知的生命を探しています

⑧ 阪神高速の取り組み
ご存じですか? 阪神高速の料金検索サイト

ちょっと行ってみたい関西うまいもん
⑩ 真妻わさび●和歌山県日高郡

Hanshin Highway TIMES
⑫ 「高速道路リニューアルプロジェクト」のホームページが新しくなりました/STOP! NAGARA DRIVING PROJECT/
お客様満足アッププラン2021 小さなことからコツコツと/フォトコンテスト「阪神高速のある風景」

表紙イラスト〈島崎橋から3号神戸線「魚崎出入口」付近を望む〉/青山大介:昭和51年神戸市生まれ、都市の鳥瞰図絵師。代表作みなと神戸バスアイマップ他、神戸市の津波避難情報板に採用。

吉、五毛、熊内の五村、山水を樋にして水
確（みづぐるま）＝水車を以つてそれを

製す」と記載されています。ちなみに、五毛とは神戸市灘区の地名（大字）で、古地図には「胡麻生」^{ごまう}とあるので、五毛ではゴマがどれゴマ油を絞っていたのでしょうか。

江戸時代中期になると漢の酒造りが本格化します。新田開発や農業技術の発達によって米がだぶつくようになり、幕府が米を使用する酒造りを奨励したのがきっかけです。灘目の水車の主な活用も、酒米の精米にシフトします。

住吉川上流には、今も山岳地図に五輪場、八輪場などの地名が残ります。輪と
いうのは水車を数える単位で、五輪場は
5つの水車があった場所という意味で
すね。また『摂津名所図会』からも、上
流だけでなく、現在の阪神住吉駅のあたりなど、かなり海に近い下流域にも水車
小屋があったことがわかります。

水車小屋は70～80坪、あるいは100
坪ほどの大きさで、小屋の中央に大き
な水車を設置。川や水路から引いた水
を桶で小屋の屋根に導き「天掛け」と
言つて屋根の上から水車に水を落とす
ように掛けて回転させました。水車に
は太い軸棒を通し、その両サイドに50基
ほどずつ臼を置きます。そして回転す
る動力で計100本ほどの杵がペったた
んぺったんと臼を搗いたのです。上流
の小屋では水車の下に勢いのある水流

ろもありました。

こうした水車小屋を建て經營したのは、住吉川周辺の地主たちです。地主はそれぞれ酒蔵と契約し、契約先の酒米の精米を請け負いました。水車小屋が稼働したのは酒造りの時期と同じく冬季の3カ月間ほど。職人を雇うのも地主です。職人は農閑期でのかせぎとして、丹波や播州からやってきました。水車小屋での労働は単純にみて、水車の速度や臼の加減などによる精米の質が洒度のよいしさに影響を及ぼすことにから、職

消えたかつての名菓品・難_{なだ}目_{もく}素_そ麵_{めん}



このころ、酒米の精米と同様に、小麦粉の製粉を行う水車小屋も数多くありました。その小麦粉でつくられたのが、「灘目素麵」です。住吉川東の青木村の「灘目区役所の裏にある、水車の広場。住吉川水系の水車小屋に関する簡単な案内板があり、酒米を精米した臼なども展示されている。

人が奈良で三輪素麺の製法を習得して帰ったのが始まりで、素麺の乾燥に適した六甲おろしや水にも恵まれた灘だけに、江戸時代の終わりから明治にかけては出荷量日本一誇る名産品でした。ところが灘目素麺を実際につくっていたのは、でかせぎに来ていた龍野の人たち。しだいに、彼らはでかせぎに来るのをやめ、彼らの地元でつくり始めたのが現在の揖保乃糸です。一方、灘目素麺は下火になり、今では幻の名産品となつてしましました。

「水車」。現在、山屋のひとつがあつた文化史料館副館長によれば、明治から大正時代にかけては住吉川周辺や御影石（花崗岩）が産出したのも、水車小屋が活気づいたひとつの要素でした。御影の浜から全国へ出荷したので御影石と呼ばれます、が、産地から命名するなら本来は“住吉石”ですね。浜近くには観音寺があり、御影石を加工する石工さんも多かった。

田区民会館横に復元された、「山田太郎・次郎水車」。現在、山區民会館のある場所は、まさにかつて、水車小屋のひとつがあつ場所。

真右下／姫路獨協大学副学長で神戸深江生活文化史料館副館の道谷卓さん。「住吉川の水車小屋が全盛期だった明治から大にかけて別の一面もお話ししましょう。当時、住吉川周辺や御影は財界人たちがぞぞって本宅を構えました。彼らは住吉川近くに観音林俱楽部」という社交場をつくり交流。日本の経済は観音俱楽部で決まるとも言われていました。また、時の山本内閣を総辞職に追い込んだッキード事件の大正時代版「シーメンス事件」の主人公・ピクトル・ヘルマンの屋敷も住吉川沿いにありました。水車小屋が栄えたのと同時代に同じ場所で、日本の経済や歴史を搖るがす出来事が起こっていたというのも、またおもしろいですね！」

す 水車小屋が油や素麺そして日本
一の酒どころと「灘の酒」を大
きく発展させたことはまちがいありま
せん。

の使命を終える時が来ます。電気の普及により酒蔵では電力による精米工場を併設するようになります。さらに決定的だったのが、昭和13（1938）年の阪神大水害です。多くの水車小屋が流れされ、需要が減っていた水車は再建されることはありませんでした。昭和54（1979）年、最後まで残っていた、住吉川上流にあった線香の粉をひく水車小屋も火事で焼け、水車小屋の歴史も途絶えてしまいました。

ただし、今でも白鶴美術館の南西あたりなど住吉川の山手の住宅地を歩くと、溝に水が流れているのに気づきます。あの溝は昔の水路です。また、地元の方々の協力のもと、山田区民会館横には水車も復元されています。水車小屋は地域の産業を築き上げた大切な遺産です。住吉川で多くの水車が活躍していいた歴史をみなさん知つてもらいたい

く、御影石町などの地名にそのなごりが見られます。



★本往吉神社

住吉大神（表筒男命（うわつつおのみこと）、中筒男命（なかつつおのみこと）、底筒男命（そこつつおのみこと）の三神から「我和魂を祀るように」とご神託を受けた神功皇后が、この地に住吉大神をお祀りされたのが始まりとされる。住吉大神と神宮皇后の四柱をお祀りする。大阪の住吉神社はここから移されたものであるため、本住吉（もとすみよし）と呼ぶと伝えられる。



★ 倚松庵
(谷崎潤一郎 旧邸)

文豪・谷崎潤一郎が昭和11（1936）年から7年間、暮らした旧邸。松子夫人やその妹たちをモデルとした小説「細雪」の舞台としても知られる。昭和4（1929）年に建てられた日本家屋には、暖炉やステンドグラス付の扉がついたモダンな雰囲気の応接室などもある。現在の位置の150m南にあったが、平成2（1990）年にこの地に移築。著書や参考文献などを集めた「谷崎文庫」を併設。谷崎潤一郎直筆の作品も展示・閲覧できる。



★白鶴酒造資料館

大正時代に建てられた木造の酒蔵を活用し、酒造資料館として公開している。直径3m・約800kgもある大桶を阿弥陀車（あみだぐらま）で1階から2階へ上げている様子をはじめ、蒸米をむしろに広げて放冷する様子、麹室（こうじむろ）の中で作業する様子など、蔵人たちが働く姿を人形で再現することで、昔ながらの酒造り工程をわかりやすく展示している。



第三章：无生之命篇

所場（職人が生活した場）、洗場、釜場、麹室、醸造蔵、槽場、圓場といった酒造りに携わる職人の仕事と生活が、昭和初期まで実際に使われていた酒造用具を通じて体感できる施設。国の重要有形文化財の酒造道具類が展示される。屋根は本葺、外壁や土塀は焼杉板張り。館内にも樹齢400以上の木柱や梁が使田される。



魚崎小幡官

★星崎村八幡神
旧魚崎村の氏神。五百（いお）八幡神社とも呼ばれる。伝説によると、三韓出兵のために神功皇后が船を集めさせたところ、この浜に五百隻の船が集結したことから、五百嶺と呼ばれ、のちに魚崎と地名を改めたとも。また、境内にある松の切り株は「神依りの松」と呼ばれ、三韓から帰国する際に神功皇后が、船を航った松のなごりだと伝わる。